流水抄

井本農一

角川書店

流水抄

井本農一

角川書店

流水抄　　井本農一

昭和55年3月15日　初版発行

発行者　角川春樹

印刷所　東洋印刷株式会社

製本所　株式会社鈴木製本所

発行所　株式会社　角川書店　東京都千代田区富士見2—13　㊞ 3-195208
TEL東京 (265) 7111〈大代表〉　㊞ 102

Printed in Japan
© Nōichi Imoto 1980
落丁・乱丁本はお取替えいたします
0095-883087-0946(0)

目次

I

花を追うて　九
火蛾の町　一七
『小公子』を読んだころ　二六
初日の出　三五
「金魚のうた」のことなど　四四
残花　五二
＊
木曾の旅　六一
早春の旅　六四

枝垂れ桜　六八
＊
紀行と旅行記　七二
自然な旅行記を読みたい　七五
船と鳶と　七八
旅談義　八四
旅することと見ること　一〇一

II

花の遅速　一一七
故山本東次郎の話　一二〇
トマト・蔓れいし・西瓜　一二三
雲巌寺と植木老師　一二六
ずどーんと肝っ玉に　一二九
父の日記から　一三二
『ホトトギス』と青木健作　一三六

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

青木健作と成田　一四〇
名前談義　一四八
小学校の友　一五〇
惚れた女　一五五

Ⅲ

紅梅と白梅　一六三
風がくれたる落葉　一六八
季　語　一六九
桜の句　一七三

＊

英語の俳句　一七五
心の真実　一七七
頭の俳句的運動　一七九
反俳句的社会と反社会的俳句と　一八二
山頭火と現代　一八五

*
孤独な良寛　一八八
良寛頌　一九八
*
芭蕉と『おくのほそ道』の旅　二〇二
北海道や千島を見たかった芭蕉　二二三
芭蕉の書と俳諧　二二七
芭蕉の一句　二三一
蕪村の一句　二三六
大雅と蕪村と狂言「花子」　二三八
*
連歌師という職業　二三三
あとがき　二三七
初出掲載誌紙一覧　二三八

流水抄

I

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.c

花を追うて

ようやく暖かくなった四月一日に、大和の室生寺にお参りをした。ここは亡妻から何度も話を聞いていたところなので、初めて来たのだけれど、初めてのような気がせず、懐かしい気持ちがした。百円で白い小さいろうそくを一本あげて、深く祈った。「女人高野蠟燭白くともしけり」と句に作ってみた。薄紅梅が満開である。有名な五重塔は、女人高野にふさわしい、やさしい美しさだ。春の陽がおだやかに差して、観光客もあまりなく、うっとりとするような気分である。

大和路から帰って四月十五日に、東京の郊外の青梅の枝垂れ桜を見に行った。まず青梅駅のそばの梅岩寺へ行った。根際から二股に分かれていて、幹のまわりは二、三メートルもある大木である。長く垂れ下がった枝々に、花がびっしりとまみれついている。垂れ下がった枝先は、根元よりもっと低く、崖下の民家の屋根に届きそうだ。折りから少し出て来た風に、ゆさゆさと揺れるさまは、桜色の裸身の美女がからだをくねらせて悩むようである。

案内をしてくれたKさんは、ひょいと思いつくと、夕食前の三十分間桜を見に来るそうだ。いつだったか、この夜桜を見に来たら、こちらのあすなろうの大木の上から、向こうの山の木に、むささびが鳴きながら飛んだそうだ。「むささびの鳴き声は気味が悪いでしょう」と言ったら、「そうですね、羽根を拡げた鳥のようにまっすぐすーっと飛びました」と言う。

梅岩寺から金剛寺へ行く途中で、七兵衛地蔵に立ち寄った。

七兵衛は江戸時代にこの地にいた義賊で、三メートルのさらし木綿を地につけず、風のように早く走ることができたという。昼間は普通のまじめな農夫で、夜になると、甲斐・相模・秩父あたりに、さっと出かけて、一稼ぎしては、その夜の中に戻り、窮民に施したと伝える。中里介山の『大菩薩峠』に出てくる七兵衛はこれだなと思いながらお参りした。

金剛寺は駅の向こう側に渡り、十分ほど歩いたところにある。枝垂れ桜は境内の池のそばにあった。ここのも大きな木で、満開である。時折り吹く風にさっと花吹雪が散る。近寄って見ると、花は花弁の先に紅がさしている。女の口紅のようだ。ここにも桜のそばにあすなろうの大木がある。芭蕉の句に「日は花に暮れてさびしやあすならふ」という作があるが、桜とあすなろうとは対照の妙がある。今は桜が花やかであすなろうは目立たないが、やがて日がかげっ

てくると、あすなろうが黒く夕空に浮かび上がってくるだろう。芭蕉の句もそんな情感を詠んだもので、一日じゅう春の明るい日ざしの中で咲き匂っていた桜が、夕方になって花見の人々も帰り去り、宵闇の中に色を失いかけたとき、昼間の花やかさの中では気がつかなかったあすなろうが黒々と浮かび上がって来たところを摑んでいる。急に目立ち始めたあすなろうによって、花やかさのあとのさびしさが、具象的に表現されている。もちろんそこには、檜に似ていて檜でない、あすこそは檜の木になりたいと思いながらなれないでいる「あすなろう（翌檜）」ということばの哀れもある。

この寺には、平将門が地中にさした枝が根づいたという、梅の古木がある。もう花はあらかた散っていたが、この梅の木の実は夏になっても黄熟せず、いつまでも青いまま残っていると言う。この土地には他にもそういう梅があり、青梅の地名はそれによるそうである。古木の幹はほとんど朽ちて空洞になり、根際から若木が出ている。それにしても、平将門を祭った寺社や将門にちなむ旧跡が、関東の一帯に数多く残っていることは、坂東の人々の、都の権力に対する潜在的反抗心を示すものであろうか。

三番目の枝垂れ桜は、青梅市の郊外の禅寺にあった。このあたりの豪族であった三田氏の菩提寺が、この瑞龍山海禅寺だという。私の知っている三田氏は、室町時代の連歌師柴屋軒宗長

の『宗長日記』享禄四年（一五三一）の条に出てくる三田政定である。そのころ三田政定は扇谷上杉氏の被官で、武蔵の国勝沼すなわち今の青梅市に城を持ち、このあたり一帯を支配していた。宗長と三田政定とは享禄四年七月に四首ずつ贈答歌をとりかわし、また宗長の師である宗祇の年忌に連歌興行をする約束であったが、政定は宗祇の年忌である七月二十九日を前にして、突然二十八日に勝沼城に帰り、宗祇年忌の連歌興行は中止になった。このとき宗長がどこにいたかはっきりしないのは、『宗長日記』の享禄四年の記事が前後錯綜しているからだが、あるいは鎌倉ではないかと思われる。三田政定は宗長と和歌の贈答をしたり、連歌を作ったりする文雅の士であった。宗祇の年忌連歌興行を宗長と約束しながら突然勝沼城へ戻ったのは興亡常なき戦乱の時代だったからであろう。それから十五年後の天文十五年（一五四六）四月には北条氏康が武蔵の国河越に上杉氏を攻め、上杉朝定は戦死して、扇谷上杉氏は滅亡する。扇谷上杉氏の被官だった三田氏もまた滅亡したに相違ない。栄枯盛衰のただならぬ戦乱流離の世の中であった。最近の世の中を不確実性の時代だなどと、したり顔に言うけれど、現代こそはもっとも安定した時代ではないか。安定しているからそんなことを言う余裕があるのだろう。中世五百年、栄枯盛衰はまさに雲の往還のごとき時代が続いた。今日の比ではない。三田氏は亡び、この寺も今はひっそりとした曹洞宗の禅寺だが、境内の枝垂れ桜はりっぱな老木で、花は

もう満開を過ぎているものの、深く垂れた枝は静かに風に揺れ、昔を語り顔であった。桜の下に大きな、平らな坐禅石があり、その上に花びらがはらはらと散りかかる。

その日はとうとう奥多摩の御岳の登り口まで足をのばし、多摩川の上流に面した古い料亭の「河鹿園」の川っぷちの部屋で、岩に激して流れ去る水を眺めながら盃を挙げた。女中が「今日とれたものです」とヤマメを焼いて来てくれた。谷は暮れやすい。日がかげったかと思ったら、宵闇が漂い始めた。川の向こう岸は河原になっていて、子供や若い人たちが川に石を投げたりして遊んでいたが、急にひっそりとした。ただ、河原のはずれの方に、ずうっと肩を寄せ合っている若い二人連れだけは、そこにも宵闇が迫っているのに、まだ動こうともしない。そこでは時間が停止しているのだろうか。向こうは時間が余っていて長い未来があり、こちらは時間切れが迫っていて払えども尽きない老愁がある。川は空しく流れ去って愁人のためにしばらくもとどまらない。「杯を挙げて愁を銷せば愁更に愁ふ」であった。

去年山形県の寒河江の花見を誘われたが行けなかった。「今年は少し遅れていますから五月の始めごろがよいでしょう」と、四月の二十日過ぎに加藤さんから電話があったので、五月四日に東京を立った。山形の駅に出迎えてくれた加藤さんの自動車に乗って、雪どけの水で増水

している最上川の上流を渡り、数百本の桜桃畠のまっただ中で自動車を降り、ふらりふらりと歩き出したが、何だか夢のような気がした。さくらんぼの桜の花は、白くて小さく、染井吉野や山桜などに比べると、一つ一つの花は見劣りがするが、小さい花が枝にいっぱいかたまって咲いており、そんな花盛りの古木が数百本も咲き続いているのは、やっぱり見事である。残雪が白く残っている山々を背景に、見渡すかぎり続く桜桃畠を、私は茫然として眺めた。

チェホフの「桜の園」に出てくる桜の老木も、桜桃らしいから、きっとこんな桜の花が咲いたのだろう。幕切れに桜の老木の切り倒される音が丁々と聞こえてくるのは、この桜桃なのだなあと思いながら、いつまでも立ち尽くしていた。

寒河江の高等学校に行ったら、学校は体育祭で、今やフィナーレの綱引きが始まろうとしていた。ピストルの合図で、熱気のこもった掛け声が、「よーいしょ」「よーいしょ」と続き、三十秒ぐらいで勝負がついてピストルが鳴り、「わあーっ」と喚声が上がる。次々と組を交代して何回もやる。高台から見おろしていると、いかにも壮快で清潔で、ほほえましい。近代的スポーツのように技巧的でなく、単純素朴なところが、高校生らしくて実にいい。私は「綱引のピストル鳴れば余花落花」と作ってみた。ピストルが鳴るとその響きで満開を過ぎた余花が散るなどとは、旧派もいいところ、月並の典型と言われそうだが、そこがおもしろいところなん

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com